

少々辛口 大相撲観戦雑記
～平成24年九州場所を振り返って～

中盤までは優勝争いが面白くなりそうな気配があったが、白鵬の久しぶりの優勝（23回目）が14日目に決まってしまう、興味半減の場所・・・かと思いきや、見所の多い場所だった。
15日間を振り返って、気が付いたことを殴り書きしてみようと思う。

<1> 久しぶりの二横綱

新横綱が誕生した。不知火型の土俵入りをする横綱が二人並ぶ場所など滅多に体験できない。相撲好きとしては又とない貴重な場所である。新横綱はまだ土俵入りに慣れている訳ではないが、何場所か経過してある程度の出来栄えになって来ると、二人の横綱の個性が見えて面白いだろうと思う。



新横綱の土俵入りは往々にして所要時間が短めである。手慣れた横綱の重厚な土俵入りと、初々しい横綱のきびきびした新鮮さとを二つ並べて見るのも面白い。

日馬富士は二場所連続優勝を引っ提げて横綱の地位に上り詰めた。この連勝がどこまで続くのかかもしれないと、千秋楽全勝横綱相星決戦を期待または想像したファンは少なくなかったと思う。

衆目の期待に反して、後半失速して9勝6敗という「見るも無残な結果」に終わった。しかし、日馬富士の大関在位期間の全成績を冷静に眺めて見ると、まるで考えられないことでもないかもしれない。横綱昇進にやや否定的な見解を示した方々は同じような見方かもしれない。

興味のある方は、先場所（平成24年9月場所）終了後の駄文「好きだからこそ言う 大相撲観戦ひとりごと」を参照願いたい。

（画像は日本相撲協会公式サイトで公開されているものを使用しました）

<2> 大関のリストラクチュアリング

日馬富士が横綱に昇進したことで一名減ったがまだ大関は5人もいる。その内3人（琴欧洲・琴奨菊・把瑠都）がカド番だと言うのではや開いた口がふさがらない。かねてより大関の技量審査（リストラ）を行って数人に減員する必要があると思っていたが、遂にその日が近づいてきたのかもしれない。

二日目、把瑠都が松鳳山のすくい投げに敗れた時に怪我をして翌日から休場となり、来場所は関脇に降格することになった。琴欧洲・琴奨菊・鶴竜の三人とも前半戦で3敗を喫し、勝ち越しがようやくという状態だった。しかしこの中の誰かは来場所また負け越すかもしれない。何しろ大関は二場所で8勝22敗の成績を上げさえすればその地位が守れるのだから。

只ひとり10勝5敗を上げた稀勢の里も、未だに自分の相撲の型が定まらない。腰高の欠点が是正されない上に脇が甘く相手の差し手を軽く許してしまう。突き押しもできるし、鋭いおっつけもあるし、四つ身になっても相撲が取れるが、腰を下して脇を固めなければいずれの場合も勝ちにはつながらない。何とかならぬものかと、テレビ観戦でも溜め息が出てしまう。

<3> 豪栄道と妙義龍

先場所までの妙義龍の活躍に刺激されたのか、同じ部屋の豪栄道が一皮むけたようだった。立ち合いの鋭い突っ込みができるようになり、低い位置から相手に圧力がかかるようになった。さらに、差し手争いの中で、相手に前まわしを取らせない手の使い方やまわしを素早く切る技は見事だった。鋭い立ち合いの後に、素早い動きで二の矢・三の矢が撃てるようになり、進歩を感じる場面が多かった。二横綱を破ることはできなかったが、11勝4敗で技能賞受賞は充分評価に値するものと言える。

一方の妙義龍は、先場所まで見せた低い姿勢からの鋭い寄り身が見られず、予想に反して6勝9敗となり来

場所は平幕からやり直しということになってしまった。しかしながら、10日目までで2勝8敗となっていたが残り5日間を、一横綱二大関を破って4勝1敗で切り抜けることができたのはさすがと言える。来場所の復活を期待したい。

<4>九州場所の目玉は誰だったか

平幕力士の中では、栃煌山・旭天鵬・豊ノ島らが好成績を上げたが、自己最高位の前頭二枚目に上がって来た松鳳山の活躍が一番目立った。

松鳳山の先場所までの相撲は、短軀にも関わらず相手かまわずのど輪攻めで突き進み、後には引かない正直一本の相撲ではあるが少々乱暴な相撲でもあった。のど輪だけに拘り過ぎて脇がガラ空きの状態でしばしば不覚を取っていたが、今場所はこの欠点が見事に修正されていた。相手とその時の状況に応じて変化を持たせた突き押し、さらにはその後におっつけとはず押し、まわしを取っての寄り身、差し手を返してのすくいなど機敏に様々な動きを展開する。そして、まわしが取れなければ鋭い小手投げもあるし、土俵際でも最後まで諦めない。小兵の不利を全く感じさせない相撲っぷりで三大関を破り10勝5敗を上げ、敢闘賞を手にした。稽古で鍛えられた体の張りや鋭い動き、緊迫感溢れる土俵上での表情、松谷という名で取っていた幕下の頃から注目していたが、ようやく花が開き始めた。来場所の小結への昇進が濃厚になり、さらに楽しみが増えた。

松鳳山の他にも、升ノ山・富士東・旭日松・勢などの「けれん味のない相撲」をとる若手力士が伸びてきたのは次の時代につながる明るい素材だと言える。

<5>健闘したベテラン力士

ベテラン力士の記録更新もこの場所の話題のひとつだった。

旭天鵬(38歳)は優勝争いの一角に居て10勝5敗の成績を上げた。通算124場所の戦績は824勝807敗22休となり、勝ち星数では相撲史上に残る名力士に並ぶ所に来ている。若の里(36歳)も通算場所数は若の里と並ぶ124場所で、813勝644敗124休、今場所は後半苦戦したが8勝7敗の成績を上げた。

両力士ともに来場所以降も記録を更新し続けてくれるに違いない。この二人の記録が基礎的な稽古がきちんと出来ていることに裏打ちされていることは、土俵上を見ていればすぐにわかる。若手力士や足踏みをしている中堅力士達は見習うべきだろう。

<6>驚くほどの新入幕ではなかった

新入幕の常幸龍にはマスコミや相撲解説者達が多く期待を寄せていた。初土俵から10場所目で果たした入幕、鳴り物入りで上がって来たので多くの人注目することになった。結果は6勝9敗に終わり、ことによると十両に戻って出直しになるかもしれない。立派な体で、すぐにも上位に進出できるのではないかと報じられていたが、相撲っぷりが結果を物語っていた。立ち合いは定位置か半歩踏み出した程度の所で、しかも胸を出して相手を受け止めるだけのものだから相手に圧力は殆どかかっていなかった。稽古土俵で上位力士が胸を出すぶつかり稽古のような相撲では勝てるわけがない。二歩・三歩と突き進む踏み込みがなければ幕内では通用しない。

<7>相撲史に残る後味の悪い勝負

九日目の日馬富士・豪栄道戦は歴史に残る珍勝負となった。

土俵上の熱戦の最中、「日馬富士の足が土俵外に出た」と見た湊川審判(元小結大徹)が手を上げて「勝負あった」を宣言した。行司の目にもアナウンサーや解説者の目にも、テレビ機数の観客の目にもそうは見えない。呆気にとられた行司の顔つきが印象的だった。

審判が土俵に上がって協議が行われた結果、「審判の見間違いによる誤審」とわかり勝負は「やり直し」ということになった。やりなおしの一戦は日馬富士の速攻圧勝の結果となった。

初戦では豪栄道が善戦しており、あのままの流れだと恐らく日馬富士は負けていたかもしれない展開だったが、このような結果になってしまった。豪栄道はこのショックから後半崩れるのではないかと心配したが、そのようなこともなく前述のような結果を残したので安心した。一方の日馬富士は「星を拾った」にも関わらず後半振るわず、横綱らしからぬ成績に終わった。

「人間の目での判断だから誤りもあるだろう」というコメントをした人もいたが、それですまされる問題ではないような気がした。ビデオ監視室での情報と土俵下の審判席の情報との結合によるリアルタイムな判定が可能な仕組みの検討の余地もあるかもしれないが、この一件に関して言えばそれほど問題でもない

「誤認による誤審」は明らかだった。

さらに不思議なことに、湊川審判からの「進退伺い」もなかったし、審判の辞任等の協会からの処分も何ら発表されなかった。「立行司は差し違いをしたら切腹」という聖職であり、「審判はその立行司の裁きに一撃を与えることができる」立場にあることを考慮すると、このままで良いのか？の疑問が残った。

以上